

京ちゃん、学校へ行く

写真は季刊フォーラム『教育と文化』81号の表紙だ。今回の特集は、「教育のなかの『合理的配慮』を問う―障害者差別解消法施行に向けて」である。特集の執筆者のなかに、林智宏さんの名前もある。京ちゃんのお父さんだ。これまで断片的に聞き、見てきたことが、コンパクトにまとめられている。京ちゃん家族の努力と苦労の一端が伝わってくる。最初の京ちゃんが登校する朝の様子から紹介しよう。



長女、京香は名古屋市立堀田小学校4年生。朝出発の準備に親が手間取っていると脈拍を上げ機器のアラームを鳴らし「早く学校へ行きたい」と急かします。普通学級で人口呼吸器と共にクラスメイトと学んでいます。自分の声で話すことはできませんが、学校生活では楽しいこと、充実したことがあれば目を輝かせ、眉毛をグングン上げます。逆に自分の思いが汲みとってもらえなかったとき、授業や行事にうまく参加できないことがあると左の上唇をひきつらせ怒って訴えます。4年前、私たちは決意をし「学校生活において必要な医療的ケアを含む合理的配慮を保証し、保護者の付き添いなく普通学級入学を実現してください」と教育委員会に要望書を提出しました。

そのあと、学校施設の改善などの「合理的配慮」、生徒たちの柔軟な対応、学校との当事者を主体にした話し合い、要望などを具体的に述べていく。「娘や両親が一番悲しく憤りを感じるのは、教員や介助者から(そういったつもりはなくても)気持ちを汲みとったり、向き合う気持ちを感じにくかったり、学習目標や安全面が優先されすぎて本人の参加したい気持ちが置きざりにされ、工夫がされないときです」と指摘する。「共に生活するなかで」合理的配慮が発展、見出され、決意をしなくても地域の学校で普通に過ごせる環境を切に願い、地域からも声を上げていたいと思います、と結んでいる。



写真は今年のちょうど今頃、12月18日の名古屋では珍しい大雪の朝だ。京ちゃんが「早く学校に行って、みんなと遊び、勉強したい」という気持ちが伝わってくる。

(2015年12月17日)